

# プーリア州ポッジアルド市、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ 教会壁画の保存と活用

～南イタリアの洞窟教会壁画と日本の装飾古墳壁画の調査からの考察～

The Preservation and Utilization of *Santa Maria degli Angeli* Church, Italy, Puglia, Poggiardo

-Consideration from Study of Cave Church Mural of Southern Italy and Ancient Tomb Mural of Japan-

関谷 倫寿

Tomohisa, SEKIYA

## 要旨:

私は金沢大学フレスコ壁画センターの実施する南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトに同行し、その劣悪な環境により消滅の危機を迎えている多くの洞窟教会壁画を目の当たりにした。これらの壁画をどのように保存・活用すべきなのか。

現在の修復倫理では、壁画は可能な限り原地で保存することになっている。しかし、南イタリア洞窟教会壁画の現状や、剥がされた壁画の保存や活用を自分の目で見て、現地保存は絶対ではないと感じた。今後の「壁画」という文化財の保存を考えて行く上で、剥がされた壁画の保存や活用を研究することは有意義であると思い、特に注目したのが実際に壁画が剥がされ、保存されているサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会である。

サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会壁画の保存・活用方法は、他の南イタリアの洞窟教会壁画や日本の装飾古墳壁画の保存・活用方法とどのような違いがあり、どのような共通点を持っているのだろうか。それぞれの現地調査の考察から、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会壁画の保存・活用方法の特徴を見出すことが本論文の目的である。

キーワード：壁画、修復、保存、活用

## Abstract:

I was accompanied south Italy medieval mural diagnostic group research project to implement the Kanazawa University frescoes center. I was witnessing a cave church murals are many a crisis of extinction due to its poor environment. How should we save and utilize these murals.

In the recovery current ethical Mural is supposed to be stored in the original place as possible. However, I felt the current situation and of southern Italy cave church mural, to see with my own eyes the use and preservation of the mural that was peeled off, local storage is not an absolute. I thought that on the go thought the preservation of cultural property in the future of "mural", to study the use and preservation of the mural that was stripped to be a meaningful, mural is peeled off in fact, was particularly interested is saved it is *Santa Maria degli Angeli* church is.

What is the difference between saving and manner of utilization of the ancient tomb mural decoration and Japanese cave church murals of southern Italy other, save manner of utilization of *Santa Maria degli Angeli* church murals, have what in common I wonder if that. From consideration of the field survey of each, to find the characteristics of the storage and utilization methods of *Santa Maria degli Angeli* church mural is an object of the present paper.

**Keywords:** Mural, restoration, preservation, utilization

## 1. はじめに

壁画は建造物に描かれているため、タブロー画のように持ち歩くことができない。その壁画も建造物もどちらも保存していくことが大切だが、それは非常に難しく不可能に近いと言える。特に南イタリアに散在する多くの洞窟教会壁画は、その劣悪な環境により消滅の危機を迎えている。私は金沢大学フレスコ壁画センターの実施する南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトに同行し、そのような洞窟教会を見てきた。そこで壁画をどのように保存していけばよいのかということを考える機会に多く恵まれた。そんな中であつたのが、壁画が剥がされて、博物館に保存されて

いるサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会である。

第二次世界大戦で、大きな被害を受けた建造物の再建に伴って、建造物に描かれていた壁画は壁から剥がしてパネル装、つまりタブロー画とすることで、保存環境の整備された美術館や博物館に展示、収集し、条件さえ整えば建造物の再建後に元の壁面に戻した。代表的なところでいえばピサのカンポサントなどが挙げられる。しかし、1964年にヴェネツィア憲章が採択され、壁画を剥がして保存することは、批判的となってしまった。現在の修復倫理では、壁画は可能な限り原地で保存することになっている。

現在、壁画は可能な限り原地で保存することになっており、壁

画を剥がして保存することはかなり強く否定されている。しかし、南イタリア洞窟教会壁画の現状や、剥がされた壁画の保存や活用を自分の目で見て、現地保存は絶対ではないと感じた。今後の「壁画」という文化財の保存を考えて行く上で、剥がされた壁画の保存や活用を研究することは有意義であると思い、特に注目したのが実際に壁画が剥がされ、保存されているサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会である。

1964年のヴェネツィア憲章が採択されたことで、壁画を建造物から剥ぎ取らずに保存すべきという倫理が確立した。そのため、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会の修復は批判的になってしまったが、南イタリア洞窟教会壁画の現状を見れば、この教会の保存・活用は、高く評価できるのではないかと。日本の装飾古墳壁画や南イタリアの洞窟教会壁画の保存・活用の例をパターン化し、その考察から今後の「壁画」の保存・活用の在り方を考えていきたい。

## 2. 調査地について

下記の表は、調査地をまとめたものである。

原地	オリジナルの壁画の所在地
サン・ヴィート・ヴェッキオ教会	ポマリチ・サントマージ財団博物館
パードレ・エテルノ教会	
サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会	アルド・モーロ博物館
ヒャーガンサン古墳	ヒャーガンサン古墳(復原)
横山古墳	横山古墳(復原)
高松塚古墳	奈良文化財研究所(壁画修理作業室)
キトラ古墳	

それぞれの調査地の概要について簡単に述べておく。

サン・ヴィート・ヴェッキオ教会は、グラヴィーナ・イン・プーリアの旧市街地の南に位置するフォルナーチ地区で、スカレーゼ家が所有する農園の中にある。この洞窟教会は、1956年に国が買い取り、1958年にローマ中央修復研究所が壁画をマッセッロ法(壁画の描かれた凝灰岩をそのままブロックで切り出す)で切断して移動、修復された。1967年にグラヴィーナ・イン・プーリア市にある、エットーレ・ポマリチ・サントマージ財団博物館内に、元の教会と同じ建築空間が作られ、そこに切り取られた壁画すべてが組み込まれた。

パードレ・エテルノ教会は、グラヴィーナ峡谷を挟んで旧市街地の反対側(西側)に広がる、凝灰岩台地に掘られた洞窟教会である。1957年に国立ローマ修復研究所が、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会に続いて、このパードレ・エテルノ教会の壁画を剥がして移築した。剥がした壁画は、サン・ヴィート・ヴェッキオ教会の壁画が移築保存してあるエットーレ・ポマリチ・サントマージ財団博物館の小展示室の壁面に移動されている。

サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会は、1929年に下水道の工事の際に偶然発見、発掘された。洞窟教会内に描かれていた壁画は、1955年にカビや炭酸塩の脅威から守るために全てマッセッロ法によって剥がされ、国立ローマ中央修復研究所に移された。近くのバスクワレ・エピスコポ広場に1975年に建設された特設

のアルド・モーロ博物館内に移築保存され公開されている。

ヒャーガンサン古墳は、佐賀県鳥栖市の九千部から杓子ヶ峰を経て東へ延びる高位段丘から南に突出した標高58mの丘陵状に立地していた。6世紀後半の豪族とその一族の墓で、横穴式石室の装飾古墳である。1999年の調査の終了とともに古墳の解体・石材の移動を行ない、2000年には石材保管先の梅坂公園において復原整備を開始した。

横山古墳は、鹿央地区に隣接する鹿本郡植木町に所在していたものだが、九州縦貫自動車道の建設予定地にあったため、1969年の発掘調査後、石室部分は解体され保存されていた。風土記の丘「肥後古代の森」整備事業の一環として鹿央地区の熊本県立装飾古墳館隣接地に移築復原し、あわせて見学施設を設け復原整備され、1993年に完成した。

高松塚古墳は、奈良県高市郡明日香村に存在する円墳で、1972年の発掘調査で、壁画の存在が明らかとなった。キトラ古墳は、奈良県高市郡明日香村大字阿部山に存在する円墳で、1983年、ファイバースコープを使って石室の内部調査を行ない、壁画の存在が明らかになった。現地保存という方針だったが、度重なるカビの発生や、漆喰の劣化を止められないことから、石室を取り出し修理するという方法が取られました。キトラ古墳壁画に関しては漆喰部分のみを剥がして修復している。現在はどちらも修理作業施設に保存されている。

## 3. それぞれの調査地のパターン化

それぞれの調査地の公開の特徴をパターン化すると、以下のように分けられる。

### (1) 「保護的公開」

例) サン・ヴィート・ヴェッキオ教会、パードレ・エテルノ教会

- ・常時公開
- ・マッセッロ法による移動・保存によって、南イタリアに散在する洞窟教会壁画に比べ良い状態で保存されている。
- ・そのままの状態を保って失わない(保存)というよりは、気をつけて守る(保護)に近い。

### (2) 「教育的公開」

例) ヒャーガンサン古墳

- ・常時公開(市役所文化財担当課に申し込み)
- ・社会科見学などで、毎年200人以上の児童が訪れる。
- ・この地域に存在する古墳や遺跡も活用し、文化財や郷土の歴史を学ぶことのできる場として機能している。

### (3) 「実験的公開」

例) 横山古墳

- ・原則、春(3・4月)、秋(10・11月)に公開。場合によっては熊本県立装飾古墳館で申し込みをすると見学可能。
- ・装飾古墳館の研究として、装飾古墳の試験公開・一般公開を模索して、公開による保存上の影響を調査している。(温湿度のモニタリング、保存設備の検証など)
- ・これには横山古墳は国や県からの文化財指定を受けてないという背景がある。今後の日本の装飾古墳の保存・活用・対策という点で、大いに試金石となり得るのではないだろうか。

### (4) 「保存的公開」

例) 高松塚古墳、キトラ古墳

- ・年に1、2回の限定公開。壁画を「現在の状態よりも悪化させない」(保存)ということを最優先している。
- ・今後の保存・活用に関しては、現在検討されている最中である。(現地保存するのか)

#### (5)「観光資源的公開」

例) サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会

- ・マッセッロ法による移動・保存によって壁画がきれいな状態で保存されている。
- ・現地にはレプリカを設置し、発見当時の空間を体験できる。
- ・同市にあるサンティ・ステファニ教会と連動した観光スポットとなっている。

### 4. 日本の装飾古墳壁画とサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会壁画の保存・活用の比較

ヒャーガンサン古墳は、石室を常時公開し装飾を無料で見学することができ、市内外の小中学校に対して歴史学習の教材として利用されている。さらに田代太田古墳の年1回の一般公開にあわせて公開、また、この地区に所在する剣塚・庚申堂塚などの大型古墳や国史跡安永田遺跡や赤坂古墳文化財を体系的に活用し、市民をはじめとする多くの人々にヒャーガンサン古墳のみならず文化財についての理解を得、郷土の歴史に対する意識の高揚を図る場となっている。

入口の扉を開けると、見学性を重視した比較的広い前室がある。玄室と外を遮るのは入口の扉のみで、壁画保存の観点から見ると芳しくない。室の奥壁には装飾を保護する薬剤を塗布しているため、公開・活用に重点をおいた整備が行なわれた。保存よりも公開に重点を置いており、「教育的公開」といえるだろう。サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会にも年1、2回市内の小中学生の社会科見学を受け入れており、「教育的公開」の要素も含んでいると考えられる。

横山古墳では、熊本県装飾古墳館の研究として、装飾古墳の試験公開・一般公開を模索して、公開による保存上の影響を調査しており、その対象地として最初にモニタリングされ、さまざまな実験が行われている。まさに「実験的公開」である。これには横山古墳は国や県からの文化財指定を受けてないという背景がある。時代に先駆けて、マッセッロ法による保存・活用をおこなったサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会と通ずるものがあるではなからうか。

日本の装飾古墳壁画の保存と活用は、高松塚古墳やキトラ古墳が象徴しているように、未だに歴史は浅く、今後の方針も未だ定まっていないし、数多くの装飾古墳壁画が公開されずに保存されている。私たちは、日本の装飾古墳で先駆けて行われている横山古墳における研究を、様々な視点から分析し、正しく評価していかなければならない。そうすれば、今後の日本の装飾古墳の保存・活用・対策という点で、大いに試金石となり得るだろう。

### 5. 南イタリアの洞窟教会壁画群のなかで

今回の調査地である3か所の南イタリアの洞窟教会壁画は、いずれも国立ローマ中央修復研究所のマッセッロ法という共通の修復方法で、移動・保存された。そのうちのひとつであるサン・ヴィート・ヴェッキオ教会においては、洞窟教会から切り取られた

後、壁画ブロックは背面をそぎ落とされ、一定の厚さに整えられて、描画面の修復と固着作業などが施されると、世界各地を巡回してイタリアの文化財保存に関する高度な技術を示し、好評を博した。世界的にも一定の評価が与えられていたのにもかかわらず、数年後の1964年にはヴェネツィア憲章が高らかに打ちだされたことで、マッセッロ法による修復は批判的になってしまった。しかし、当時は批判的だったとしても、現在の状況から考えると批判的になり得るだろうか。

現在、南イタリアの多くの洞窟教会壁画が、湿気によるカビや苔の繁殖の影響を受け、強い太陽光、風雨にさらされ、鳥や虫など生物には無防備という劣悪な環境下に置かれ、消滅の危機を迎えている。それに比べ、マッセッロ法によって移動・保存された3か所の南イタリアの洞窟教会壁画は、温度・湿度が一定に調整された環境で保存されてきたため、劣化や退色が見られず、非常にきれいな状態で保存されている。南イタリアの多くの洞窟教会壁画が劣悪な環境下に置かれる中で、これら3つの洞窟教会壁画は、素晴らしい保存状態のままで現在に至っているのだ。このことからだけでも、今一度、これらの洞窟教会壁画の保存・活用方法の評価について再検討するべきではないだろうか。

さらに、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会壁画は、マッセッロ法によって移動・保存されたことで、壁画が非常にきれいな状態で保存されているだけでなく、移動された後の原地を整備して、レプリカを設置し、発見当時の空間を体験できるようにしたのである。そして現在、ポツジャルド市では、オリジナルの壁画が展示されているアルド・モーロ博物館、レプリカの置かれている原地、ポツジャルドから南へ3kmのヴァステからさらに北東へ1.5kmのサント・ステファノ農園の近くにあるサンティ・ステファニ教会に連動させた観光スポットとして機能している。壁画が非常にきれいな状態で保存されているだけでなく、たくさんの人々に公開し、それだけでなく剥がされた元の教会には壁画のレプリカを配置し、発見された当時の空間を体感できるようにしているのだ。

以上のことから、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会で、他に先駆けて行なわれたマッセッロ法による移動・保存の技術は称賛に値するし、原地の利用方法についても高く評価できると考えている。

### 6. 中世洞窟教会壁画の保存・活用・対策の試金石としてのサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会

現在の修復理論では、壁画は剥がさずに、現状のまま保存されることが優先されている。しかし、現在の南イタリアの中世洞窟教会壁画群の置かれている状況を鑑みると、一刻も早く何らかの対策を取らねばならない。サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会の保存と活用方法を再評価することで、これからの南イタリアの中世洞窟教会壁画群の保存と活用における試金石となると確信している。

## 参考文献

- 1)アレッサンドロ・コンティ著、岡田温一他訳『修復の鑑 交差する美学と歴史と思想』ありな書房 2002
- 2)池田朋生、菊川知美著『研究紀要第9集 装飾古墳の博物館資料化に向けた取り組み～装飾古墳保護施設の保存環境について～』熊本県装飾古墳博物館 2012
- 3)上原貢著『フィレンツェの壁画』岩崎美術社 1973
- 4)E. マルケジアーニ他著／渡辺友市・堺憲一訳『全訳 世界の歴史教科書シリーズ 16 イタリア I』帝国書院 1982
- 5)金沢大学フレスコ壁画研究センター編集『2011年度 研究調査報告書』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2012
- 6)金沢大学フレスコ壁画研究センター編集『2012年度 研究調査報告書』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2013
- 7)北原敦著『新版 世界各国史 15 イタリア史』山川出版社 2008
- 8)来村多加史著『高松塚とキトラ 古墳壁画の謎』講談社 2008
- 9)『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県教育委員会 1984
- 10)『熊本県文化財整備報告第3集 肥後古代の森 風土記の丘』熊本県教育委員会 1995 pp28-35
- 11)『国立歴史民俗博物館研究報告 第80集』国立歴史民族博物館 1999
- 12)ジェイムズ・ホール著/高階秀爾監修/高橋達也他訳『新装版西洋美術読事典 - 絵画・彫刻における主題と象徴 -』河出書房新社 2008
- 13)ジョルジョ・ボンサンティ他監修『フィレンツェ・ルネサンス 芸術と修復展』日本放送教会 1991
- 14)相賀徹夫著『世界美術大辞典 3 GRANDE ENCICLOPEDIA dell' ARTE』小学館 1989
- 15)高階秀爾監修『増補新装[カラー版]西洋美術史』美術出版社 2007
- 16)高山博著『中東イスラム世界4 神秘の中世王国 ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路』第2版 東京大学出版会 1998
- 17)チャーザレ・ブランディ著 / 小佐野重利監訳『修復の理論』三元社 2005
- 18)辻惟雄監修『増補新装[カラー版]日本美術史』美術出版社 2010
- 19)坪井清足編集『日本原始美術大系6 壁画 石造物』講談社 1977
- 20)『鳥栖市文化財調査報告書第73集 ヒャーガンサン古墳復原整備事業報告書』鳥栖市教育委員会 2004
- 21)『埋蔵文化財ニュース 131 高松塚古墳 - 壁画保存修理のための石室解体から -』独立行政法人奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2008
- 22)『埋蔵文化財の保存と活用(報告) - 地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政 -』埋蔵文化財発掘調査体制の整備充実に関する調査研究委員会 2007
- 23)マックス・デルナー著、ハンス・ゲルト・ミュラー改訂、佐藤一郎訳『絵画技術体系』美術出版社
- 24)宮下孝晴著『フレスコ画のルネサンス 壁画に読むフィレンツェの美』日本放送出版協会 2001
- 25)宮下孝晴 / 宮下陸代監修『2010年度 フレスコ画を剥がす フレスコ壁画保存のためのデスタッコ法実習報告書』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2011
- 26)宮下孝晴著『宮下孝晴の徹底イタリア美術案内 5 南イタリアーナポリ・シチリア編』美術出版社 2001
- 27)文化庁文化財部監修『月刊文化財(547号)』第一法規株式会社 2009
- 28)文化庁文化財部監修『月刊文化財(563号)』第一法規株式会社 2010
- 28)山辺規子著『ノルマン騎士の地中海興亡史』白水社 1996
- 29)『横山古墳復原整備報告書』熊本県教育委員会 1994

- 30)Anacleto Vilei 著『Poggiardo GUIDA TURISTICA ILLUSTRATA』Italy Arti Grafiche Guido 1991
- 31)Anacreto Virei 著『POGGIARDO UN PAESE NELLA STORIA E CIVILTÀ DEL SALENTO』Italy CONGEDO EDITORE
- 32)Cristina Giannini, Roberta Roani 著『Dizionario del restauro e della diagnostica』NARDINI EDITORE 2000
- 33)G.Gabrieli 著『Inventario topografico e bibliografico delle cripte eremitiche pugliesi』Roma 1936
- 34)M.Luceri 著『La cripta di Santa Maria in Poggiardo(Lecce),in "Japigia",IV』1933

## 参考 URL

Citta di Poggiardo Lecce <http://www.poggiardo.com/>  
熊本県立装飾古墳館 <http://www.kofunkan.pref.kumamoto.jp/>  
国営飛鳥歴史公園、高松塚古墳 <http://www.asuka-park.go.jp/takamatsu/>  
国営飛鳥歴史公園、キトラ古墳 <http://www.asuka-park.go.jp/kitora/>  
佐賀県鳥栖市、市内の文化財 <https://www.city.tosu.lg.jp/1531.htm>  
文化庁、高松塚古墳・キトラ古墳  
[http://www.bunka.go.jp/takamatsu\\_kitora/index.html](http://www.bunka.go.jp/takamatsu_kitora/index.html)